

酪農総合研究所の果たすべき役割と 今年度の調査研究課題等について

雪印メグミルク(株)酪農総合研究所

はしがき

東日本大震災の被災地では、いまだに不自由な生活を余儀なくされており、心からお見舞い申し上げます。

復旧・復興への取組みが進められておりますが、依然として、放射能汚染の影響や電力需給への不安など、予断を許さない状況が続いており、一日でも早い被災地における生活、コミュニティ、産業の復興が待ち望まれます。

国の復興構想会議をはじめ、多くの機関や団体、研究者等において復興ビジョンへの議論がなされ、被災地の方々へ希望を与えることはもとより、わが国さらには世界に向け、その復興と再建への道筋を着実に実現させて行くことが求められています。

私たちも、5月中旬に茨城・福島・宮城・岩手・青森の酪農生産者及び関係先を訪問し、現地の酪農畜産関係者の復興と再建への力強いご意見も拝聴し、酪農総合研究所(略称;酪総研)としてのお手伝いや、今後の調査研究課題について、思いをはせることができました。

雪印メグミルクグループの3つの使命

1. 乳(ミルク)にこだわる 2. 酪農生産への貢献
3. 消費者重視経営の実践 を3本柱とし、コーポレートスローガン「未来は、ミルクの中にある。」を掲げ、日々の業務に努めています。

「酪農生産への貢献」については、雪印乳業(株)酪総研と酪農部、グループ企業の雪印種苗(株)が連携して、酪農生産基盤の安定と発展のために取り組んでいるところです。

酪農総合研究所の果たすべき役割

従前から、諸外国とのFTA交渉やTPP交渉参加への議論などのグローバル化が進展する世界経済の中、わが国の酪農乳業の構造改革の必要性が議論されてきました。酪農生産基盤の強化への施策や飼料自給率の向上、食糧自給率の向上、そして国土・景観の保全など、酪農乳業が果たすべき役割の重要性です。

そして、歴史的に大災害は、その時代の政治や経済、社会が抱える矛盾や本質を露呈させるとともに、大きな政治変動、経済変動、社会変動のひきがねとなっています。

そのような中、酪総研は以下のような取組みを行っています。

酪農生産に間接的あるいは直接的に関係する調査研究として、①酪農政策に関する調査研究 ②生乳及び牛乳・乳製品の需給と消費に関する調査研究 ③酪農経営の安定的向上に関する調査研究 ④国産飼料の生

産強化とその有効利用に関する調査研究 ⑤乳牛の飼養管理の向上に関する調査研究など。

また、フィールドでの酪農サポートとして、①研究成果の普及と推進 ②経営改善や自給飼料生産、飼養管理などへの技術支援 ③日本酪農青年研究連盟の支援。

さらに広報活動として、①ホームページの運用、「酪総研選書」の発行、シンポジウムの開催など。②「酪農と乳の歴史館」や関連蔵書及び報告書の活用などです。

ここでは、具体的な取組みとして、いくつかの事業活動をご紹介します。

1. 持続的酪農経営「実証農家」調査研究

雪印メグミルクグループ(雪印メグミルク(株)酪総研と酪農部、雪印種苗(株))と大学、民間コンサルト会社、地域の農協等の関係団体・機関が連携・協力して、北海道を中心に酪農生産者の理解と協力を得て進めています。

自給飼料の質・収量の改善、その利用と給与法の改善を通し、生乳生産性の向上と乳牛の健康・繁殖の改善に貢献し、それらの一貫したプロセス管理によって、経営収益の改善と安定に資することを目標としたトライアルです。

「自給飼料の生産拡大とその有効利用、飼料生産原価の低減、酪農生産性向上へのアプローチ」をベースに、土壌分析や植生調査、それに基づく施肥設計、植生の改善や草地更新を支援します。また、貯蔵飼料分析、生乳生産向上のための飼養管理や施設及び環境の改善、経営分析・診断などを行い、経営改善への支援を行っています。



実証圃：ペレニアルライグラス追播草地の植生調査



実証農家：現地検討会のスナップ

毎月の現地調査では、圃場調査や貯蔵粗飼料の在庫調査、牛群栄養状態（BCSなど）や牛群検定成績の評価、育成牛の体格測定、牛舎内換気調査などを行い、現状確認と課題抽出、今後の取組みについて検討しています。また、年2回の現地検討会と年2回の定期検討会を開催して、定性・計数的な協議を行います。

2. 自給飼料の生産拡大とその有効利用「実証圃場」調査研究

この取組みもグループ連携により、実際の酪農生産者及び団体の圃場を対象に定期的に調査します。

自給飼料の魅力を引き出すテーマを設定して、土壌分析、植生の改善、草地更新、飼料分析を行い課題抽出とその対応策について助言・支援を行います。特に、高栄養価牧草や優良品種の生産拡大に重点を置いた草地管理を推奨しています。本年度の取り組み概要は、(表-1)の通りで、アルファルファ「ケレス」の安定的な導入とその栄養評価などが主体となっています。

これまでの概要については、酪総研ホームページに紹介していますので参考にしてください。

3. 酪総研シンポジウムの開催

このシンポジウムは、お蔭様をもちまして、昨年度で第34回を迎えました。年1回の開催ですが、時宜にあったテーマを設定し、講師あるいは話題提供の先生方をシンポジストにお願いして、約200名のご参加をいただき、会場全体で総合討議・意見交換を行います。

平成21年度は、「国内外における企業、団体等の再編動向とその対応について…変貌する市場環境において、酪農乳業はどう対応していくか!!…」、昨年度は、「酪農現場におけるバイオセキュリティ…予防とリスク低減のために!!…」をテーマに開催しました。

この概要についても酪総研ホームページに掲載されております。

まとめ

今回の大震災の発生を機に、規制改革や産業構造の変革の必要性が強調されています。電力エネルギー政策はもちろんのこと、酪農乳業においても例外ではないと考えられます。

先に述べたとおり、酪農家戸数の減少や牛乳・乳製品の消費減退等による酪農の生産基盤の弱体化が懸念されています。数年前に体験した穀物原料の乱高下、国際的な経済圧力等々は、ますます激化していくことが予測されます。

国民の食と健康を支える牛乳・乳製品の安定的提供は、我われ酪農乳業の重要な社会的使命です。そのためにも効率的な生乳生産、適正な需給調整、多様な価値ある商品の開発と提供、さらには国際対応に向けて関係者の知恵を結集していくことが大切です。

酪総研も微力ではありますが、その一翼を担う立場として、より現場に近いスタンスで事業活動を展開する所存です。

今後ともご理解とご支援を宜しくお願い申し上げます。



実証圃：アルファルファ混播草地の圃場確認

平成23年度 需要喚起「実証圃場」 調査研究一覧表

No	地区	実施場所	年次	テーマ
1	八雲町	W牧場	平成20年～	リードカナリーグラス優占草地の(優良草種への)植生転換技術の確立
2	岩見沢市	H牧場	平成20年～	豪雪地帯における、アルファルファ(AF)「ケレス」越冬性の実証
3	新冠町	(株)N-A S	平成20年～	耐病性F ₁ トウモロコシ品種の大規模需要喚起
4	別海町	F牧場	平成21年～	AF「ケレス」導入による草地植生の経年変化、栄養価の検証
5	興部町	I牧場	平成22年～	北紋地域における、AF「ケレス」の安定導入の確立
6	岩手県 奥中山	M牧場	平成23年～	岩手県北部地域における、AF「ケレス」の安定導入の確立